

平成 25 年 9 月 7 日(土)同志社大学において PIC 研修会を開催しました。学習者の発達やコミュニケーション能力に応じたシンボルの使用と指導のための基礎的な学習、シンボルによるコミュニケーションが有効であった被虐待障がい者の事例を報告しました。参加した人たちからも PIC シンボルの特徴、普段の生活でのシンボル使用の実態等、いくつかの質問があり、答弁が行われました。

「コミュニケーションの基礎を育てるためのシンボルの導入と指導方法」

大阪府立茨木支援学校 槇場政晴先生

ひとは、生まれた時から、何らかの手段を用いて外界とのつながりを持とうとしています。そして、ひとは、発達とともに自分の感情や考えを伝えられるようになっていきます。そこで、今回は、欲求の確認、要求の表出、指示の理解など、コミュニケーションの発達に応じたシンボル使用のためには、どのような力が育たなければならないのかを整理しました。その上で、ひとの発達とコミュニケーションの関係を再確認しました。

「やりとりを豊かにするためのシンボルを使った指導」

京都府立南山城支援学校 藤澤和子先生

話しことばを十分に使えない人は、人とやりとりしてわかりあう経験をもつことが難しい傾向にあります。シンボルでやりとりを楽しみ、深めるためには、人と何かのテーマを共有して、シンボルで伝えたいことを表現し、応答し合える関係を作ることが必要です。そのためのテーマの選択、ボードやブック等の作成、やりとりを楽しむための指導の工夫や配慮等について、事例を通して、方法を紹介しました。

「被虐待障がい者に有効な視覚支援」

大阪府立金剛コロニー 小林美津江先生

虐待を受けた人の脳は、海馬や扁桃体の萎縮を始め、さまざまな脳領域で異常が有ることがわかっています。被虐待者は、ADHD 様の症状を有し、発達検査では短期記憶が難しい傾向があります。被虐待者の短期記憶を補完するためにも、自閉症スペクトラムを有する人たちと同様に、視覚的な支援が有効だと考えています。被虐待障がい児童が反応性愛着障害を有し、対応に困難を来していた事例に対し、PIC や写真を用いた視覚支援を行い、効果が有ったことを紹介しました。